

二人のシュナイダー

梅 原 秀 元

作家の村上春樹氏の短編に「偶然の旅人」という作品がある^①。

村上氏がアメリカにいたところに遭遇した二つの奇跡的で素敵な偶然と、彼の家のピアノの調律師から聞いたとされる偶然をもとにした一編である。その最後、村上氏は、調律師が経験した偶然の中に出てくる一人の女性の運命について、何かの神様が偶然を装いながら導いてくれるのではないかと結んでいる。歴史学に限らないが、研究をしていると、どうやっても理由づけられないことと出会ったり、研究者自身がどうやっても説明がつかない出会い——人との出会い、研究対象との出会い、史料との出会いなど——をすることがある。論文や報告でそれなりの理屈をつけても、実際には、なぜそうなのかはわからない、そういった類のものである。

筆者もそうしたものと出会ったり、そうした出会いをいくつも経験しているが、その中でも、今もって筆者をとらえて離さない、どうにも説明がつかないことについて話してみたい。それが、ハイデルベルク大学医学部精神科教室の歴史で重要な「二人のシュナイダー」である。もう少し詳しくいえば、シ

二人のシュナイダー（梅原）

ユナイダーというファミリーネームの精神科医が、ナチ期から戦後の西ドイツという、ドイツ現代史で非常に大きな動きがあった時期に連続してこの教室の教授になったということである。

シュナイダーというのは、ドイツでもごくありふれたファミリーネームである。筆者の友人にもシュナイダーという歴史研究者がいるが、彼はファーストネームもよくあるものだったので、ミドルネームを持っていた。それくらい、シュナイダーというのはありふれたファミリーネームである。

確かにありふれたファミリーネームではあっても、数あるファミリーネームの中にあって、なぜ、ハイデルベルク大学医学部精神科教室の教授が二人続けてシュナイダーなのだろうか。当然のことながら、二人の間に縁戚関係はなく、それは偶然である。

しかし、このことが私には不思議に思われ、ずっと頭から離れなかった。そして、この二人のシュナイダーは、精神医学史だけでなく、ドイツ現代史においても非常に興味深いシュナイダーであった。この二人は一体どのような人物だったのだろうか。

二人のうち、一人目がカール・シュナイダー (Carl Schneider) である。一九三二年にハイデルベルクに赴任し、一九四六年に自死している。一八九一年に現在ポーランド領となっているポーゼン (ポズナニ) 地方で生まれたシュナイダーは、ドイツ中西部のヴュルツブルク大学で医学を学び、第一次世界大戦をはさんで一九一九年六月に医師資格を得、ライプツィヒ大学医学部精神科で補助医 (Assistenzarzt) として勤務した。その後別の精神病院で勤務し、一九二六年にはミュンヘンのドイツ精神医学研究所に移り、組織学的病理学研究を行った。この研究所は有名な精神科医・精神医学者のエミール・クレペリン (Emil Kraepelin) が一九一七年に創設したもので、二四年にカイザー・ヴィ

ルヘルム協会に移管されていた。研究所は臨床部や人口・系図学部門など四つの部門に分かれており、人口・系図学部門は、精神疾患と遺伝との関係を研究していて、当時その分野で指導的な研究者でナチ期に精神医学界で指導的な立場になったエルンスト・リュディン (Ernst Rüdin) が率いていた。

シュナイダーはここに四年いたのち、ドイツ中部にあるプロテスタント系のベーテル財団が運営する精神病院に医長として赴任し、そこで患者の治療に精力的に取り組んだ。このころ (一九三二年) に、彼はナチ党に入党している^③。

ハイデルベルク大学医学部精神科教室教授のカール・ヴィルマンズ (Karl Willmans) がナチの強制断種政策を批判したことで職を追われ、その後任としてカール・シュナイダーが一九三三年一月一日に就任した。ナチ党員だったことは考慮されておらず、研究者として優秀であったことが理由とされている。大学に赴任後、カール・シュナイダーは、作業療法を組み込んだ「積極治療」や当時最新の治療法だったインシュリン・ショック療法なども取り入れ、患者の治療に熱心に取り組んだ^④。

ところでカール・シュナイダーはナチ党員ではあったが、当初はナチスが掲げる優生学や人種衛生学には距離を置いていたといわれている。しかし、一九三三年七月に制定された「遺伝病子孫予防法」(いわゆる強制断種法)以後、彼は大きく立場を変え、ナチが掲げる「民族共同体」の健康に多大な関心を寄せ、これは健康な人間だけが属することができ、病の者はそれが治るか、「民族共同体」の健康に害を与えない状態になって初めて属することができると考えるようになった^⑤。したがって、シュナイダーの目から見ると、もしそうした状態にならない・なる見込みが無い患者は、強制断種によってその子孫を残さないことで、「民族共同体」に害を与えない―迷惑をかけないので、一員になることができる

二人のシュナイダー（梅原）

ということになる。強制断種と彼が熱心に取り組んだ治療とは、矛盾なくつながっていた。

彼がいつどのようにしてナチスの考え方に共鳴するようになったのかは、いまでもわかっていない。いずれにしても、ハイデルベルクでカール・シュナイダーはナチスが唱える「民族共同体」に一人でも多く属することができるよう、患者を積極的に治療した。その成果は一九三九年に著書としてまとめられた。この中で彼は、精神医学が自然科学、特に遺伝生物学に基づくものであることを主張するとともに、治療と予防の大切さを説き、後者に関しては、遺伝病子孫予防法による強制断種の有効性を評価した。⁶⁾

彼が治療についての研究成果を本として世に出したところ、ナチス・ドイツは、精神疾患の患者や障害者に対して、強制断種よりもさらに苛烈な措置の実施へと移行する準備に入っていた。それが「安楽死」という名の下での彼らの大量虐殺であった。一九三九年初頭には子どもを対象とした「子ども安楽死」の準備がはじまり、さらにポーランド侵攻の前後の時期には大人を対象とした「安楽死」のちにT4作戦といわれる――の準備が始まった。T4作戦では、一九四〇年から四一年八月二四日の間におよそ七万人が殺害精神病院――実態は殺害施設――でガス殺された。この作戦で、カール・シュナイダーは殺害候補となった患者を実際に死なせるかどうかを鑑定する鑑定医として参加した⁷⁾。また「子ども安楽死」の枠組みを使って、自身の精神医学研究のための症例――子どもの患者――を集め、必要な検査のうちのその患者を「子ども安楽死」の殺害施設となっていた「児童少年専門科 (Kinderfachabteilung)」に送って死なせ、主に脳を取り出して標本としていた。戦争終結直後、同大学に入ったアメリカ軍は、精神科教室に一八七体分の標本があつたのを確認している。⁸⁾ カール・シュナイダーは、患者の治療に熱心に取り組み、研究によって「民族共同体」が未来も健康になることを目指していた。そのために、現

在治る見込みが無い者——「生きる価値の無い者」——を死なせて「民族共同体」への負荷を減らすとともにその体の一部を標本として研究に活かし、「民族共同体」に与る価値を新たに付与した。カール・シュナイダーにとって、治療することと絶滅させることに矛盾はなく、表裏一体の関係にあった。敗戦後、カール・シュナイダーはハイデルベルクから逃れたが、後に逮捕され、モースブルクの収容所に収容された。一九四六年一月二九日、彼はドイツの司法当局によってフランクフルトに引き渡された。カール・シュナイダーと同じくT4作戦で重要な役割を果たした精神科医ヴェルナー・ハイデ(Werner Heyde)の裁判で証言させるためだった。その折に、検察からシュナイダーは、自身が起訴された場合、シュナイダー自身の地位について将来の見通しがないことを教えられ、獄中で自死した。一九四六年二月一日のことだった。シュナイダーの同僚の多くは、戦後も引き続き研究や診療を続けたといわれている。

カール・シュナイダーが獄中であつたころ、ハイデルベルク大学では、哲学者で精神病理学者としても著名だったカール・ヤスパース(Karl Jaspers)を学長に迎えて再スタートを切ることになった。医学部精神科教室も、カール・シュナイダーが去った後の新しい教授を迎えることになった。それが、精神病理学者としてのヤスパースの事実上の弟子といわれていたクルト・シュナイダー(Kurt Schneider)だった。二人目のシュナイダーである。

遺伝生物学に基礎を置くことで自然科学に立脚した精神医学の確立を目指したカール・シュナイダーに対して、クルト・シュナイダーは、精神疾患の精神症状の記述・分類を通じてそのメカニズムや経過を明らかにすることを重視する精神病理学を研究していた。こうした立場は、カール・シュナイダーの

二人のシュナイダー（梅原）

前任者カール・ヴィルマンズが研究していたもので、彼を中心にハイデルベルク学派も形成されていた。クルト・シュナイダーも、戦後、多くの弟子を育て第二ハイデルベルク学派と呼ばれる精神病理学の研究者グループを形成し、ドイツ語圏、さらには日本の精神医学にも影響を与えた。彼が一九四七年に出版した『臨床精神病理学』^⑩は、統合失調症に特徴的な症状（シュナイダーの一級症状）を析出して統合失調症の研究や臨床に大きな影響を与え、二一世紀になってもなお、精神医学にとって重要な位置を占めている。

戦時中、ナチの「安楽死」に関与していなかったことがわかっていたこと、そして事実上の師であったカール・ヤスパースが学長になっていたこともあり、クルト・シュナイダーは一九四五年秋にハイデルベルク大学医学部精神科教室の教授となり、翌年には医学部長に、さらに一九五一年からは学長となつて、ハイデルベルク大学医学部だけでなくハイデルベルク大学全体の戦後復興に尽力することになった。

多忙な中、クルト・シュナイダーは精神病理学の研究を進めるとともに、多くの弟子を育て、ハイデルベルクは精神病理学研究の拠点となった。しかし、その弟子たちはやがて、自分たちが研究する精神病理学研究と、研修医として赴いた精神病院での精神医療との間のギャップを目の当たりにし、臨床での治療のありかたや精神医療全体の改革へと身を投じるようになった。そして、シュナイダー門下からハインツ・ヘフナー（Heinz Häfner）など西ドイツにおける精神医療改革の中心的な医師が多数輩出した^⑪。

一九九〇年代に入ると、ハイデルベルク大学医学部医学史学科では、学科長で教授のヴォルフガング・U・エックカート氏（Wolfgang U. Eckart）のもとで若手の医学史研究者が中心となつて、ナチ期の同大学医学部の歴史的検証が進められた。その際、カール・シュナイダーの存在は避けて通ることはできなかった。当時精神科教室の教授だったクリストフ・ムント氏（Christoph Mundt）も医学史学科の

研究活動に協力し、精神科教室のナチ期の歴史の対話と克服が進められ、現在に至っている¹²⁾。この対話と克服の中で、カールとクルトの二人のシュナイダーは、互いに交わることはなくとも、同精神科教室の歴史に影と光を投げかけている。

ところでカール・シュナイダーとクルト・シュナイダーは、時期は違うがともにミュンヒェンの精神医学研究所に勤務していたことがある。カールのほうは一九二六年から一九三〇年の四年間組織学的病理学の研究をし、クルトは一九三一年に同研究所の臨床部の医師として赴任し、臨床部長となった。途中、一九三九年から四二年まで軍医としてフランスやロシアで勤務したのち、ミュンヒェンのものの臨床部へともどりそのまま敗戦を迎えた¹³⁾。

ミュンヒェンの精神医学研究所といえば、エルンスト・リュデインとの関係が深く、優生学や遺伝生物学の影響が強い精神医学研究の拠点として知られていた。そうした場所で、精神病理学者のクルト・シュナイダーは臨床医として勤務していた。しかも、彼は、一九三四年に『医師のための精神科講義』(Psychiatrische Vorlesung für Ärzte) を出版している¹⁴⁾。本書には、すでに後年の『臨床精神病理学』の内容の多くが盛り込まれていた。

こうしたことを筆者はデュッセルドルフ大学医学部医学史学科にいたときに知り、何か不思議さを感じ、ミュンヒェン時代のクルト・シュナイダーについてもっと知りたい思った。そして、ミュンヒェンのシュヴァーピング地区にあるマックス・プランク精神医学研究所——前のドイツ精神学研究所——の文書館を訪れた。アーキビストにクルト・シュナイダーについての史料について尋ねたところ、文書館には全く残っていないとのことだった。アメリカ軍に占領された際に、病院の文書が散逸してしまった

二人のシュナイダー（梅原）

のではないかとのことだった。

ただ、突然やってきてくれたのをかわいそうに思ったのか、当時、附属病院の副院長で自身も医学史研究者としてエルンスト・リュディンの伝記的研究を発表していたマティアス・M・ヴェーバー氏（Mathias M. Weber）が、わざわざ文書館まで来てくれた。彼は、私に病院の敷地内を案内してくれた。その時に私はヴェーバー氏に、「クルト・シュナイダーは一九四七年にあの『臨床精神病理学』を発表しているが、あの本のエッセンスはミュンヘン時代に形成されたと考えているのだが、先生はどう考えますか」と質問した。それに対して、ヴェーバー氏は「私もそう考えています」と返してくれた。このヴェーバー氏の返事は今も筆者の心の中に強く残っている。また、クルト・シュナイダーは、「安楽死」とくにT4作戦停止後の「分散した安楽死」のころに臨床部にいて、患者の治療に日々当たっていた。状況からみると何かありそうなので、このことについてもヴェーバー氏に尋ねた。するとヴェーバー氏は、確かにクルト・シュナイダーが勤務していた時期に、そうしたことがあったけれども、クルト・シュナイダーの臨床部は「安楽死」にはかかわっていないことはわかっているとのことだった。クルト・シュナイダーはあの時期に、本当に偶々ミュンヘンにいただけだった。

こうしたヴェーバー氏との短かったが、私にとつて濃密な会話を通して、クルト・シュナイダーへの私の関心はさらに高まった。そして史料は少ないかもしれないが、いつかクルト・シュナイダーのミュンヘン時代について研究してみたいという思いをずっと抱いている。

村上春樹氏の偶然をめぐる短編から始まって、ずいぶんと遠くまで来た。

筆者がデュッセルドルフ大学医学史学科で研究していたときに、偶々ドイツの精神医学に関係する仕

事に関わり、その時に、偶然、ハイデルベルク大学の精神科のナチ期とその後のそれぞれの時期の教授がシュナイダーというファミリーネームであることに気づいた。このことから、私はこのころのドイツの精神医学に一層興味を持つようになった。結果として、私は、好むと好まざるとにかかわらず、ナチ期に行われた精神疾患の患者や障害者を対象とした大量殺害——「安楽死」——のことを学ぶことになった。それだけではなく、日本に戻ってからは、いくつかの大学の講義でこのテーマについて話し、ついには共著の本の一部を担当するまでになった。ここでこうして筆者自身の成り行きを振り返ると、偶然の果たしている役割が大きいことに気づく。未来から見れば、この偶然に対してもそれなりに因果関係を付けることができるかもしれない。しかし、筆者自身には、そうした関係を因果関係として理解することは、どこか腑に落ちない。やはり、偶然としか言えないように思う。

筆者自身の成り行き以上に、ハイデルベルク大学精神科の教授のファミリーネームが二代続けてシュナイダーだったというのは、そのことだけでは何の意味もない偶然であった。しかし、その偶然に導かれて、カールとクルトの二人のシュナイダーの歩みを紐解くと、ドイツの精神医学がナチ期から戦後にかけて背負ってきた歴史が筆者の前に現れた。筆者自身、まさか「二人のシュナイダー」から、こうした大きな歴史が出てくるとは夢にも思っていなかった。偶然を偶然として受け止め、そこから調査を始めることで、当初意図していなかったような広がりや深さを持つ研究へと連なっていく。そうしたことは、研究をしているとしばしば出会うことである。

そして、二人のシュナイダーは、ハイデルベルクよりも前に、ミュンヘンのドイツ精神医学研究所という、ナチ期に強制断種や「安楽死」と深くかかわることになる場所で、すれちがっていた。このこ

二人のシュナイダー（梅原）

とを知って、実際にミュンヒェンに行き、史料を探したが残念ながら期待した成果はなかった。しかし、マティアス・M・ヴェーバー氏と出会い、クルト・シュナイダーへの関心がさらに高まることになった。ヴェーバー氏が来ることは望外のこと、これもまた偶然のことであつた。

「二人のシュナイダー」をめぐるさまざまな偶然によつて導かれ、いまも私は二〇世紀前半のドイツの精神医学とそのころのドイツの（広い意味での）社会との関係への関心を保ち、講義や研究を行っている。これらすべてが自分にとって、自分の学問だけでなく人生にとつても大きな宝となっている。

近年、研究に対して役に立つことを求めたり、短期で結果・成果が出るような研究テーマを選ぶ風潮があるように思う。そうした中では、「二人のシュナイダー」のような偶然に身を任せたテーマ選びというのは難しいだろう。しかし、何かの折に、ふと目の前を通り過ぎた、何かよくわからないけれども、もしくはそんなものと偶然に出会い、そのよくわからないものを掬い上げ、研究テーマとして育てていく。そうした行為は、好奇心に基づいた研究の一つなのではないだろうか。老若男女問わず、好奇心を引き起こす偶然を大事にするとともに、偶然が引き起こす好奇心を大切にすること、そうした偶然に気づき、それを掬い上げられるようにすること、そのことが、近視眼的に「役に立つこと」を要求すること——近視眼的な目的合理性による研究への支配——から研究を解放し、自由な研究への道を開くのではないだろうか。

この短いテキストを筆者は十一月に執筆している。史学科の四年生が卒業論文の最終段階に入り、三年生が卒業予備論文執筆の佳境へと入っていくところである。研究の神様のようなものが偶然を装いながら、三年生や四年生が自らの好奇心に導かれるままに研究を進めるのを助けてくれていることを願って

いる。そして、二、三〇年ほど昔、よくわからない中で彼らのように始めた自分自身の研究は、偶然を旅することでもあったのではないか。そんなことを、一九四五年を境にハイデルベルク大学医学部精神科教室に現れた「二人のシュナイダー」のことから筆者は思った。

註

- (1) 村上春樹「偶然の旅人」同『東京奇譚集』（新潮文庫、一九八七年）所収。
- (2) Christine Teller, “Carl Schneider. Zur Biographie eines deutschen Wissenschaftlers”, *Geschichte und Gesellschaft* 16, 1990, S. 464-478, hier bes. S. 465-468.
- (3) Maïke Rotzoll und Gerrit Hohendorf, “Krankemord im Dienst des Fortschritts? Der Heidelberger Psychiater Carl Schneider als Gehirnforscher und „therapeutischer Idealist“, *Nervenarzt* 83 (2012), S. 311-320, hier bes. S. 311-312.
- (4) Maïke Rotzoll und Gerrit Hohendorf, “Die Psychiatrisch-Neurologische Klinik”, in Wolfgang U. Eckart, Volker Selin, und Eike Wolgast (eds.) *Die Universität Heidelberg im Nationalsozialismus*, Heidelberg, Springer Verlag, 2006, S. 909-940, hier bes. S.911-918.
- (5) Rotzoll und Hohendorf, “Krankemord”, S. 311-312.
- (6) Carl Schneider, *Behandlung und Verhütung der Geisteskrankheiten. Allgemeine Erfahrungen Grundsätze-Technik-Biologie*, Berlin, Julius Springer Verlag, 1939; Rotzoll und Hohendorf, “Die Psychiatrisch-Neurologische Klinik”, S. 919f.
- (7) 梅原秀元『『安楽死』という名の大量虐殺——その始まりと展開』中野知世・木畑和子・梅原秀元・紀愛子『価値を否定された人々』ナチス・ドイツの強制断種と『安楽死』(新評論 二〇二一年)・九五〜一六八頁。
- (8) Rotzoll und Hohendorf, “Die Psychiatrisch-Neurologische Klinik”, S. 931.
- (9) Rotzoll und Hohendorf, “Die Psychiatrisch-Neurologische Klinik”, S. 932; Peter Sander, *Verwundung des*

二人のシュナイダー（梅原）

- Krankennordes. Der Bezirksverband Nassau im Nationalsozialismus. Der Bezirksverband Nassau im Nationalsozialismus*, Gießen, Psychosozial-Verlag, 2003, S. 741.
- (10) Kurt Schneider (1947) *Klinische Psychopathologie*, Heidelberg, Springer. 邦訳：クルト・シュナイダー『臨床精神病理学』（平井静也・鹿子木敏範訳）（文光堂）一九五七年。
- (11) Casper Kuhlenkampf, "Erkenntnisinteresse und Pragmatismus. Erinnerungen an die Zeit von 1945 bis 1970", in Urtlike Hoffmann-Richter, Helmut Hanselbeck, und Renate Engfer (eds.), *Sozialpsychiatrie vor der Enquête*, Bonn, Psychiatrie Verlag, 1997, S. 84-95, hier bes. S.86-87; Heinz Häfner, "Die Inquisition der psychisch Kranken geht ihrem Ende entgegen. Die Geschichte der Psychiatrie-Enquête und Psychiatriereform in Deutschland", in Franz-Walter Kersting (ed.), *Psychiatriereform als Gesellschaftsreform. Die Hypothek des Nationalsozialismus und der Aufbruch der sechziger Jahre*, Paderborn, Schöningh Verlag, 2003, S. 113-140. 戦後の東西ドイツの精神医療改革について Steffen Dörre, *Zwischen NS-„Euthanasie“ und Reformaufbruch. Die psychiatrischen Fachgesellschaften im geteilten Deutschland*, Heidelberg, Springer Verlag, 2021 を参照のこと。
- (12) Maïke Rotzoll, Gerrit Hohendorf, Petra Fuchs, Paul Richter, Christoph Mundt, und Wolfgang U. Eckart (eds.), *Die nationalsozialistische „Euthanasie“-Aktion „T4“ und ihre Opfer. -Historische Bedingungen und ethische Konsequenzen für die Gegenwart*, Paderborn, Schöningh Verlag, 2010; Christoph Mundt, Gerrit Hohendorf, und Maïke Rotzoll, (eds.), *Psychiatrische Forschung und NS-„Euthanasie“ . Beiträge zu einer Gedenkveranstaltung an der psychiatrischen Universitätsklinik Heidelberg*, Heidelberg, Verlag Das Wunderhorn, 2001.
- (13) Gerd Huber, Schneider, "Kurt", in *Neue Deutsche Biographie (NDB)*, vol. 23, Berlin, Duncker & Humblot, 2007, S. 300-301.
- (14) Kurt Schneider (1934), *Psychiatrische Vorlesung für Ärzte*, Leipzig, Thieme. 邦訳：クルト・シュナイダー『臨床精神病理学序説』（西丸四方訳）（みすず書房）二〇〇〇年。
- (15) Matthias M. Weber, *Ernst Rüdin. Ein kritische Biographie*, Heidelberg, Springer Verlag, 1993.
- (16) 中野智世他『価値を否定された人々』

（本学文学部特任准教授）